

論点

「労働者」概念めぐる松下氏らの議論

も、わが国（新中間層問題がさかんに議論されたことがあるが、その時期は、現代史において画期的な意義をもつと考えられる「海図」——日本共産党綱領が確定される前後であった。いま、松下氏が提起している新中間層論も、今日の情勢のもとでの「海図」の理解・関連してあり、同氏は、この領域での「海図なき」状況を、つぎのように主張する。

「世界の革新運動で『階級』という基本用語でその共通の内容をもつわけではない」（「新中間層を独自に理論づけなければならぬ」今日の状況にこたえる革新理論の再生、したがって政策の実効性は確保できない」

「すべてのサービスが賃労働に転化」

松下氏は、山口定氏の論文「新中間層問題と日本共産党」（『世界』

新中間層論の非科学性



田沼 肇

新中間層論の系譜をたどると、その十数年前の台頭は、労働者階級の「中産階級化」を強調する立場と結びついていた。民社党の指導者などは「全国民の中産階級化」という極端な資本主義美化論を唱えはじめていたのである。今日、松下氏は、「（労働者階級の）二重構造の克服を基軸」にしたがって、たとえば「九〇%の中間意識にみられるような生活様式の平準化をもふまえた階級概念」への再構成を主張し、労働者階級の「中産階級化」論に新たな装いをこらんと試みている。

本来の中間階級問題を軽視

松下氏は、今日、「政治の転機がひたひたとおしよせつつある」にもかかわらず、事態は「いわば『海図なき』状況の現出といつていい」といっている。じつは、十数年前に

師、研究者などの「賃金取得知識人」を「新中間層」とし、労働者と区別すべきだとしている。

科学的な社会主義の立場からいえば、物質的財貨を直接に生産している人びとだけが労働者だ（この考え方は、明らかに正しくない。資本主義のもとでは、剰余価値の生産、利潤の獲得こそが目的とされるのであるから、物質的財貨を直接に生産しているか否かで、労働者と「新中間層」を分けることはできないのである。

労働者階級の基幹部分を構成するのは工業労働者（鉱山・鉄道・通信・建築などの諸部門の労働者をふくむ）であるが、剰余価値生産という見地からすれば、剰余価値を資本家の金庫に流しこむもの、すなわち商業・金融部門など流通過程の労働者も、当然、労働者階級に属するのであって、「新中間層」ではない。

「事務員」や「技術職員」を、十把ひとからげにして「新中間層」と規定するの、粗雑にすぎる。科学的な社会主義の立場は、いわゆるホワイトカラーの多くの部分が、資本主義的生産の発展とともに、労働者階級の序列に参加するようになってきた事実を、重視してきた。

的ではない労働者の位置づけにも、深い関心がはられてきたのである。さらに、半プロレタリアートの概念も精密に構築され、山口氏が「新中間層」にふくめられている公務員や教師などについて、むしろその急速なプロレタリア化の意義が解明されてきた。彼らは、いまや労働者階級と密接に結びついた存在であり、その大家族にふくまれるのである。

このように、科学的な社会主義の立場は、資本主義的生産の発展にともなう生ずる変化を十分にふまえて、労働者階級の概念を、その境界部分や過渡形態をもふくめて、具体的に規定していった。したがって、科学的な社会主義の立場に正しくたつかり、

「労働者階級をめぐる諸問題は、つぎの『新しい』か、『政治的政策決定基準がアイマイになる』などということはありえず、逆に相対する「アイマイ」なのは「新中間層」という概念そのものだといわなければならない。

科学的な社会主義こそ「単色」化を批判

また、松下氏は、山口氏の論文から、「雇用者」のほとんど全てを単色の「労働者階級」とみるような発想は、「複数階級論」の承認と矛盾している。しかし、わが国において科学的な社会主義の立場にたつ人びとが、階級構成表を作成するにあたって、政府統計の「雇用者」概念を利用してはならない事情はあるにしても、階級構成表が現実を平板に表すことになる限界の指摘をほし

め、「雇用者」概念をきびしく批判しつづけてきたことは、周知のことである。労働者階級の構造にかんする研究もすみ、労働者階級を一面的に単色のものとみるような、トロツキストなどの科学的な社会主義と無縁の教条主義的傾向も、克服されてきているといつてよい。このような、わが国における理論の展開を無視し、「新中間層」の概念を認めないことを理由に、「複数階級論」の承認と矛盾する」といふのは、いわんとするところ、理解できないし、そもそも労働者階級を単色にみているとの論拠自体が成立していない。

松下氏は、「革新理論のフレーム」をかたちづけてきた資本主義階級・労働者階級、資本主義・社会主義というマクロの二分法図式が、それ自体として、たまたま政策の決定基準としては役立たないという事柄が広がっている」とのべている。しかし、わが国における科学的な社会主義の理論のフレームが、単純な二分法図式でないことも、革新統一戦線の前進をめざす日本共産党の具体的な政策が証明しているし、むしろ、松下氏が科学的な社会主義の立場を「二分法図式」ときめつけるためにもちだしている新中間層論こそ、非科学的なものであることが、鮮明になってきた。

（たぬま はじめ・法政大教授）